I-7

公共空間におけるサインデザインに関する研究
言語的機能と空間体験の形成
A Study on the Sign Design in Public Space
Linguistic functions and characteristics that shape spatial characteristics

○畑山恵里佳[1], 大川碧望[2], 佐藤慎也[2]
*Erika Hatakeyama[1], Aono Okawa[2], Shinya Satoh[2]

With public signs, we can use not only the language we are familiar with but also the public space without any problems. In addition, public signs assist users with the spatial experience that architecture provides. This study examines the possible roles and expressive possibilities of signs in public spaces by focusing on the linguistic functions and the design characteristics that shape spatial characteristics.

１. 研究の背景と目的

国境を超えた人の往来の増加に伴い、公共空間を利用する人の層が多様化し、精通する言語に限らず意味の理解を助けてくれるサインの重要性が高まっている。サインは公共空間において「動線誘導などの物理的な機能」[1] を持っていると言えるが、サインの役割はそれだけに留まらない。

同じ用途の建築で利用されることを前提とし、つくられたサインデザインであっても、種類によって与える印象が異なる。私たちは公共空間を利用しながら、建築に加えてサインから空間の性格を感じとり、その施設のイメージを形成しているのではないだろうか。つまり、サインは「施設そのものの価値やイメージをシンボルとしてビジュアライズする機能」[1] も持っていると言える。

デザインは一つの知的財産であり、計画的に補正をしながら、その機能や美的価値を上げていくことが､経営的に考えてもプラスに働く。[1]サインが持つ、国境や文化の壁を超えた言語的機能と、空間の性格を形成するデザイン性に着目することで、公共サインが持ちうる役割や表現の可能性について考察する。

２. 言語的機能の形成

２-１. 標準化されたサイン

現在私たちが一般的に想像する非常口サインは、1980年に日本からISO(国際標準化機構)に提出され、1987 年に ISO 7010 で規定された国際規格の一つである。火災時、炎の赤に対して補色である緑が最も見えやすいという理由で定められた緑についても、基準が定められている。日本案は、1979 年に消防庁が非常口サインを募集し、集まった、3000 点あまりの中から、識別性テスト、デザイン評価、心理テスト、照明実験、煙の中での見え方テストによる審査を経て選出された。[2] ISO に日本案が提出される前は、ソ連案が国際規格の有力候補であった。そのソ連案と最終的に採用された日本案を比較すると、バランスや影など細かい点は異なるものの、人が扉へと走って向かっていく構図は似ている。言語や文化の違いを超えて、人々が世界的に共通で持つ「急いで扉の外に向かう＝逃げる」という認識がサインとして形になった結果である。現在のサインは、生まれ育った国、文化に関わらず、全世界の多数の人たちが同じように理解することができ、世界共通の視覚言語として機能している。

２-２. サインを構成する要素

ISO と、JIS（日本産業規格）でそれぞれ規定されているトイレサインは、ズボンを履いた人とスカートを履いた人の立ち姿を描いている。この情報から、日本人である私たちは、文化的に、男性と女性だと理解できる。その他の国においても、形は違えど、それぞれの文化における男と女をサインとして形に表したものが、トイレサインとして機能している。

トイレ以外の空間を表すピクトグラムの多くは、行為を表したものが多いのに対して、トイレサインは、その空間が男女で区別されることに注目している。これは、このサインが日本において見られ始めた 1960 年代の日本では、トイレは和式が主流であったことに由来すると考えられる。トイレの文化が異なるすべての人にとっても、「男女別で利用する空間＝トイレ」を共通して認識できたと考えられる。

日本で多く使われる、赤と青の色による区別方法であるが、規格では白黒で表記されており、海外で

1：日大理工・院(前)・建築、2：日大理工・教員・建築

はこの色分けが用いられていないことも多い。男性は青、女性は赤で示されるのは、アメリカ本国での乳児の服装色の習慣が、男子は青色、女子はピンク色だったことに由来すると言われている。[3] この、色分けによる区別は、3 つの観点から問題があると考える。1 つ目に、色弱者など人によって見え方が変わること、2 つ目に、ジェンダーカラーの考え方には文化差があること、3 つ目に、空間デザインに影響を与えること、である。日本全体で 300 万人以上いるとされる色弱者の識別を困難にし、男は青、女は赤という固定観念の創出を助長する可能性もある。また、建築空間と合わないサインによって、利用者の空間体験に影響を及ぼしかねない。

3. 空間体験の形成

3-1. サインデザインと空間の性格

横須賀美術館では、「よこすかくん」と名づけられたピクトグラムが採用されている。「よこすかくん」は、サインのシステムを持ったキャラクターであり、横須賀美術館のアイコン的存在となっている。情報伝達に加え、シンプルかつよこすかくんの性格や感情まで伝わるサインが、建築空間に親しみを与え、利用者が感じ取る美術館の性格を決定づけている。

日本画を専門とした山種美術館が、新築ビルの一画に移転した際につくられたサインは、「控えめで繊細でありながらもきちんと機能するサイン」を目指してつくられた。[1] 細い線とふくよかな面によって構成されたコントラストのあるサインは、決して大きくはない美術館のスケールと日本画で多く使われる墨の濃淡と調和し、美術館が持つ性格とよく馴染んでいる。

これらのサインは、空間の性格を構成する役割を果たす点では共通しているが、空間の体験を象徴的に表現する横須賀美術館のサインと、場を形成する一つの要素として空間の体験を完成させる山種美術館のサインは、同じ美術館のサインデザインと言えど、建築との関わり方が異なっている。

3-2. サインデザインの手法[1]

産婦人科と小児科が併設された梅田病院は、白い布でできたサインが特徴的である。少子化により産婦人科の利用者が減る中で、病院を利用する妊産婦がリラックスして過ごせる空間をつくるために、布という柔らかな質感と丸みが鍵となっている。また、布の中でも汚れやすい白を選び、白さを保つための管理を行うことで、病院全体で清潔感を保つというサービスを表現している。

犬島アートプロジェクトのサインは、銅の精錬所の遺構から受けた感覚を表現することで、施設全体の価値や視覚イメージを増幅させる。ロゴは、古代ローマ最盛期の皇帝の碑文に用いられていたローマ碑文書体をベースに、遺構のランドマークである煙突を、J と I で表現している。これは、実際の碑文で見られる、「DIVI（神)」のような神聖な単語を強調するために、上に伸びた「I」から発想を受けている。また、瀬戸内伝統の焼板杉の黒壁とステンレスシルバーで、地域の伝統性と現代性を表現したり、腐食鉄とカラミ煉瓦の色や質感によって、明治期の遺構の印象を強くしたり、遺構の文化的価値や自然環境に合わせた素材と加工法でサインを施している。

青森県立美術館のサインに用いられる書体は、水平・垂直・斜め 45 度の等幅の直線のみで構成することで、意匠性をできるだけ排除している。さらに、厚みや重さを持たない情報のみがそこに浮いているイメージを表現するために、支持体を設けず、直りや手書きで文字が施されている。建物の使い方が変われば、サインが変わるのは必然であるという考えから、改変時のことを考えて計画された結果である。デザインの絶対性が排除されている。

4. 結論

サインが視覚言語として言語機能を果たすためには、人が持つ文化や身体能力の違いを踏まえて、共通の認識を形にすることが必要であると同時に、固定概念を植え付けてはいけない。また、サインは既にある建築空間の性格を表現することはもちろん、新しくつくり変える可能性も持ち合わせており、形のデザインから、素材や加工法、表示方法まで全て組み合わせることで、サインが形成する空間体験の可能性はもっと広がっていくと考える。今後は、サインデザインだけではなく、それぞれの公共空間の構造や特徴、性格についても明らかにすることで、建築空間とサインの関係性と可能性について探る。

参考文献

1）小川雄一：グラフィックデザイナーのサインデザイン , 誠文堂新光社 , 2009. 9
2）Up&Coming '14 秋の号 ， フォーラムエイトパブリッシング , 2004.10
3）日本トイレ協会：日本トイレ協会ニュース No.14 – 3, 2014.10